

愛媛の桃産地形成の過程と品種及び販路の変遷

窪田 重治

はじめに

“白桃の甘露の筆拭きあへず” 黙禪の句がある。桃は夏の果物の王者である。肉質は柔軟多汁完熟すると果皮は容易にむける。あの感触と甘い香り芳醇な果肉は、他の果物では味わえない桃果特有の風味を有している。

筑波 (1983, PP 96-99) によると、桃は中国との因縁深い果樹である。中国における桃は仙人の世界の果実で、桃源郷の伝説もある。わが国でも仙人の果実なるが故に、桃は魔除けの神通力があるという思想考え方が神話伝説にある。

桃の歴史は古く、スモモ・アンズ・ナツメ・くりなどと共に平安朝末から鎌倉時代にかけて、日常生活における重要な果実の一つになったが、本格的栽培は江戸時代に入ってからで、当時の品種は果肉が堅く品質は不良であった。京都伏見は産地として全国的に有名で桃山の地名はこれに由来する。京都府久世郡・愛知県三河地方・広島県豊田郡・秋田県南秋田郡などが中心で、それぞれ固有の品種を生産していた(小林, 1986, P 161) という。

本稿は愛媛県における果樹栽培の先駆をなした桃の商業的栽培地域の発達のプロセスと、品種交代および桃の販路について地域変遷史的考察をした。

1 愛媛の桃栽培の始まり「興居島の桃」

わが国最古の農書といわれる『親民鑑月集』(愛媛県教育会北宇和郡部会1933, P 87) に、「桃・楊梅・青梨は六月に実を取る。如何様に植えてもめばえやすきものにて、また接木にしてもよし」とあり、南予地方では古くから作られていたようである。

桃の商業的栽培の起源は嘉永4(1851)年興居島村^{こごしま}由良の小林佐七郎が50aの開墾畑に撰津(現兵庫庫)東野から導入した樽屋早生を栽培したのが本県では最

も古いという(愛媛県青果組合連合会1968, P 50, 愛媛県1988, PP 353-357)。

愛媛県農会(1916, PP 10-12)の『伊予乃園芸』は、「温泉郡興居島村は古来桃産地として有名なるが、其中興は嘉永4(1851)年同村大字由良の人小林佐七郎なる者、果樹栽培の有利なるに着目し、所有の山林5反歩(50a)余りを開墾し撰津東野より桃苗500本を購入し耕して栽植し、折柄三津港の果樹商全園累々たる美果を見て一手に購入せんことを希望したるも、当時は斯かる多量の桃果を売買したる実例なく価格の標準の立たざるため、米25俵を以て全収実と交換の契約をなし、茲に於て該商人は未だ採収せざるに先だち、25俵の米俵を運びて同村海岸に積上げたが、之を視たる村民は僅かの開墾地の桃樹よりかかる多額の米俵の産額に驚歎し、小林翁は其成績を示して勧誘したる結果、年を逐ふて続々栽培者増加するに至れり。

当時の桃は『樽屋早生』と称する大形果の品種なりしが、小林翁の巧妙なる栽培法により豊大なる美果を産し、掌上漸く三個を載せ得る位にして世人は之を佐七桃と命名せり。以来全村に普及し産額の増加するに従い興居島桃と通称するに至れり。安政年間小林翁は再び撰津東野の種苗家を訪れ、なし・びわ・うめ等の良種を求め来りて蕃植を図れり……。」と記している。

この記載の内容は田村信嘉(1910)の『晴耕園史^{註1)}』PP 1-4』によるもので、さらに『晴耕園史』には「自来只管果樹栽培に勉め、悠々果林の清気を食とし75歳の高齢を保って明治22(1884)年病没したり。」とある。

「果樹栽培古参者 小林佐七郎に次いで安政初年の頃より桃樹を植付果樹栽培を志したるは由良の坪内市蔵・東田甚蔵・山内伊左衛門・山本與左衛門、泊の小池幸作・船越^{ふねこし}の山内重五郎等古参者とすべし。東田甚蔵は俗称好五郎と呼びたければ、其栽培の桃果は小林佐七桃に対し好五郎桃なる名称を唱へられたり(図1)。続いて由良の東矢馬吉・中矢光五郎・中山佐五次・松本権左衛門・酒井久次郎・北浦^{きたうら}の中野松五郎(栽培地

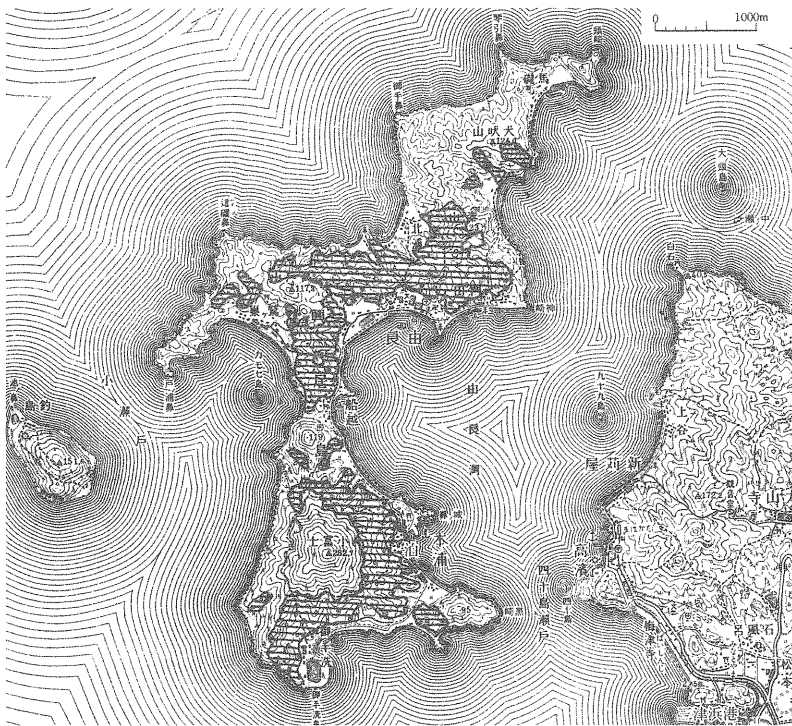


図1 興居島の果樹（桃・枇杷）の分布
 地理調査所5万分の1 三津浜図幅 昭和3年修正測図 昭和22年発行

国木)^{かどた}、門田の寺本嘉名吉等を古き栽培者とす。之等は安政の年代也。」(田村1910, PP 1-4)とある。

2 桃の集团的栽培と産地の転移

愛媛県の落葉果樹の主要なものはくりと柿で、桃の地位は低いが栽培の古さでは首位である(表1・2)。明治中期〔明治21(1888)年〕の桃の産地は北宇和・南宇和・西宇和の南予3郡内で64.7%を占めているが、生産量も少なく散在的に作られていたもので(表3)、本格的な栽培地域は、温泉郡興居島村(現松山市)を中心に越智郡島嶼部、松山市周辺が独占的で、西宇和・北宇和郡以外の他の地域は極めて少ない(愛媛県1954, P 48)(表4)

表1 愛媛県産果樹の種類別栽培面積と生産量

種類	年次	昭和27年 (1952)		平成17年 (2005)	
		栽培面積 ha	栽培面積 ha	栽培面積 ha	生産量 t
果樹総栽培面積		8,047.9	20,465.4	312,956.7	
常緑果樹 (柑橘類)	温州みかん	4,423.4	7,500.9	142,655.9	
	夏みかん	1,005.1	619.5	12,955.0	
	ネーブル	76.6	144.7	1,492.8	
	雑柑	397.5 ^(いよかん含む)			
	いよかん		4,531.1	100,234.2	
	ハッサク		289.4	3,763.4	
	その他柑橘		2,834.7	32,116.7	
	柑橘類計	5,902.6	15,920.1	293,218.0	
落葉果樹	リンゴ	17.2	12.3	153.0	
	和梨	340.3	91.1	}	856.4
	洋梨	6.3			
	ぶどう	54.0	157.0	1,351.7	
	もも	270.9	104.5	737.7	
	びわ	140.0	112.0	361.4	
	くり	242.0	2,634.7	1,715.3	
	うめ	21.3	205.2	1,277.0	
	甘柿	416.7	286.1	1,795.1	
	渋柿	598.9	412.8	5,313.6	
	いちじく	10.8			
	すもも	26.3	30.1	160.0	
	桜桃		1.1	1.0	
キウイフルーツ		443.2	6,030.4		
その他果樹		57.8	229.7		

注 昭和27年は愛媛県1954愛媛県農村経済研究所報第12号 愛媛県農業振興計画書第一次 P 47。
 平成17年は愛媛県農林水産部農産園芸課2006果樹統計資料により作成。

表2 果樹の種類別栽培面積の変化

種類	明治37年 (1904)	大正元年 (1912)
もも	210町歩	172町歩
柿	162	227
温州みかん	136	572
なし	97	564
うめ	75	77
リンゴ	13	123
夏みかん	—	637
くり	—	120
びわ	—	87

愛媛県青果農業組合連合会1968愛媛県果樹園芸史P50により作成

表3 愛媛県郡別もも生産統計

郡名	年次	明治21年 (1888)	%
宇摩		6石	0.5
新居		199	17.8
野間		25	2.2
和気		160	14.3
温泉		2	
西宇和		146	13.0
北宇和		345	30.9
南宇和		233	20.8
合計		1,116	100.0

(愛媛県農事概要)

阿川一美1988果樹農業の発展と青果農協・財団法人果樹産業振興桐野基金P505により作成

表4 愛媛県の郡別ももの栽培面積

郡名	明治42(1909)年		大正4(1916)年	
	栽培面積	%	栽培面積	%
宇摩	76,000 ^{ha}	4.7	44,500 ^{ha}	2.9
新居	21,000	1.3	66,828	4.4
周桑	—		9,500	0.6
越智	122,000	7.6	122,312	8.0
温泉	796,803	49.8	830,700	54.3
伊予	38,200	2.4	23,000	1.5
上浮穴	—		60,800	4.0
喜多	5,300	0.3	22,000	1.4
西宇和	298,000	18.6	139,415	9.1
東宇和	47,000	2.9	57,000	3.7
北宇和	177,400	11.0	112,305	7.3
南宇和	19,500	1.2	39,900	2.6
合計	1,601,203	100.0	1,528,260	100.0

愛媛県農会1916伊予乃園芸102頁により作成。

明治10(1877)年晴耕園主田村昌八郎が興居島村由良梶之波の山林10a余りを開墾して桃樹を移植した。明治16(1883)年愛媛県勸業課は「天津水蜜桃」・「上海水蜜桃」の苗木を興居島村に配布して、田村昌八郎に試植させた。(阿川1988, P11)。

明治17(1884)年『水蜜桃』及び『蟠桃』・『天津水蜜桃』・『上海水蜜桃』の両水蜜桃を苗木商より購入し、由良の酒井久次郎・田中兵次郎・北浦の中村助次郎・中野鶴次等が移植した。

明治33(1900)年晴耕園で桃果の袋かけを始めて好

結果を生み、35(1902)年には『天津水蜜桃』の袋かけが島内に普及した。明治30(1903)年興居島の桃畑は60ha、大正9(1920)年105haに達し、村内果樹の58.2%を占めた。昭和5(1930)年の140haをピークに戦中戦後にかけて減少し、昭和25(1950)年62ha(図2)その後も樹令の老化や忌地性で改植がすすまず、昭和60(1985)年農業センサスでは、栽培戸数22戸成園2haを残すのみで、温州みかんブームで、温州みかん・宮内伊予柑園に転換してしまった(窪田1990, PP64-65)伊予果物同業組合(1932)の『伊予のくだもの』(P

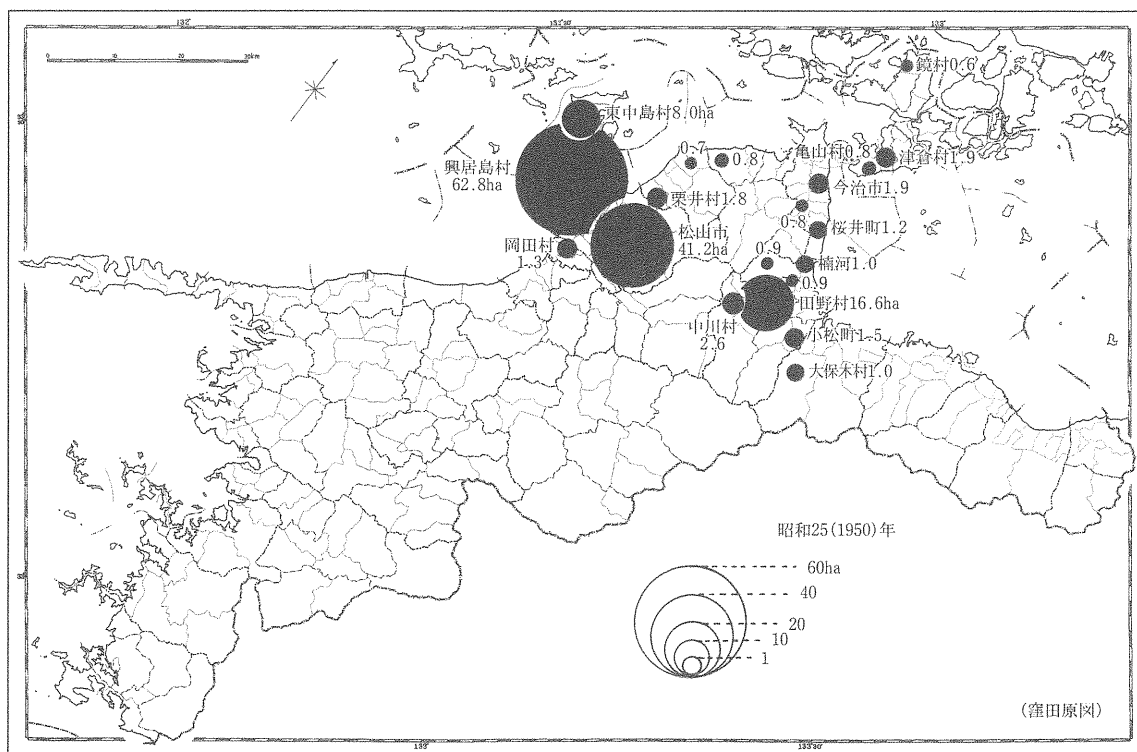


図2 愛媛県の市町村別ももの栽培面積分布 (0.5ha以上)

資料1950農業センサス、愛媛県1951愛媛県市町村勢要覧により作成

29)は「明治26(1893)年温泉郡垣生村村上松太郎氏の勤めによって、油屋濱太郎氏兵庫川邊郡の苗木を植付たるに始まり、今出は今尚桃の村として知られ、和気村太山寺も管内桃産地である。初めは『天津水蜜桃』が主であったに相違ない。現今では天津は余程減って、興居島は広島県大長(現呉市)と共に桃をもって聞へ古い歴史をもっているが、これらは『油桃』^{注2)}であった」と記している。

村上(1951, PP91-92)は「吉田浜の砂丘に桃が盛んに栽培された時代がある。伊予節にまで「吉田さしも」と唄われたが、昭和18(1943)年海軍飛行場となり跡方もない(現松山空港)(図3)。昭和の初めには砂丘の一部に『天津水蜜桃』が1haばかり残っていた。

以前は桃は興居島と生石村吉田が生産地で垣生村今出(現松山市)、伊予郡岡田村塩屋(現松前町)の砂丘、城北の堀江に8ha1.2tの生産がある。品種は「大久保」・「離核」が主で、大久保は玉が大きく送り用としても罐詰用としても有望品種である」という。

温泉郡中島町神浦(現松山市)の桃は、昭和初期の経済不況で疲弊した経済更正対策として果樹栽培に着

想し、興居島に見習って早く金になる枇杷・桃を栽培した(村上1951, P92)。

「桃・栗三年」と、一年生苗木を植付てから桃は普通3年で資本を投下してから回収の始まる期間が早い。また本県の桃は岡山・香川の桃より一週間ほど早く出荷できる立地条件が一つの魅力であった。

明治後半から大正初期に温泉郡を中心に、越智郡・周桑郡でも生産されるようになった。特に周桑郡田野村(現西条市)には、明治40(1907)年ころ西長野の岡本友市が温泉郡から苗木を持ち帰った『土用水蜜桃』が最も古い。『田野村誌1957, P411]によると、「彼は大正2-3(1913-1914)年ころ、上海・天津・アムステルダム種を各数本温泉郡から導入した。大正6(1917)年榑部国三郎が園地を創設。佐伯清次・永井梅吉・山内陽平らが開園して、大正9(1920)年3月には戸田肇が『天津』・『アムステルダム』・『離核』各3反歩を栽植し、昭和5(1930)年から西条・新居浜市場の王座を獲得した」という。

こうして、愛媛の桃は昭和15(1940)年の415haをピークに、大戦中の食料優先政策による減反とその後の荒廃で栽培面積・生産量ともに低迷した(表5)。



図3 松山市西部、吉田浜から西垣生今出に至る砂丘の分布・2万分の1地形図
(明治36(1903)年陸地測量部作製)

3 戦後の桃産地の転移形成

昭和23-24 (1948-1949) 年ころから、果物価格の高値に支えられて再び増産がすすみ、昭和28 (1953) 年から罐詰用桃の増植ブームとなり新植がすすんだ。

果樹増植五ヶ年計画で、昭和31 (1956) 年20ha110 t、5ヶ年後220ha・2,200 tと積極的増植計画を打ち出し、そのため、松山市30ha、伊予郡広田村20haなど全県的に罐桃の植栽が行われた。

温泉青果農協は独自の加工施設を保有し、昭和32(1957)年には桃生産販売推進班を設置、農林省園芸試験場の

表5 愛媛のもも栽培と生産の推移

年次	栽培面積	生産量
大正3～7年平均	195町歩	292千貫
大正8～12年平均	200	300
昭和元年	211	352
5	219	152
10	259	530
11	267	426
12	271	655
13	274	691
14	319	691
15	415	706
16	307	811
17	371	683
18	350	614
19	214	339
20	188	230
21	176	127
22	145	177
23	137	198
24	173	425
25	151	481
26	236	180
27	271	307

愛媛県1954、愛媛県農村経済研究所報第12号、愛媛県農業振興計画書第1次P51により作成。

技術員を招き積極的に罐桃の増産にのりだした。

ところが、昭和35 (1960) 年生食用・加工用を含め、愛媛の桃は栽培面積587ha、生産量5,470 tをピークに温州みかんとは対象的に衰退期を迎えた(図4)。罐詰専用の黄肉種は白肉種に比べて果肉が硬く需要が不振であったこと、炭疽病の有効な防除対策がなかったこと、整枝技術の未熟さなどから、最盛期には重信川の河川敷や松山市新浜・衣山など30haもあった罐桃は早くも30年代半ばにはかなり伐採された。

昭和40 (1965-) 年代の温泉青果農協管内の生産状況は約100ha、1,000 t、品種別では『大久保』70ha・『白桃』14ha・罐桃11haその他5haが、昭和60 (1985) 年には9.4haになった。栽培の中心地は伊台・五明地区で『あかつき』を主品種として栽培し、松山市場で高い評価を受けた(愛媛県1988, PP 353-354)。

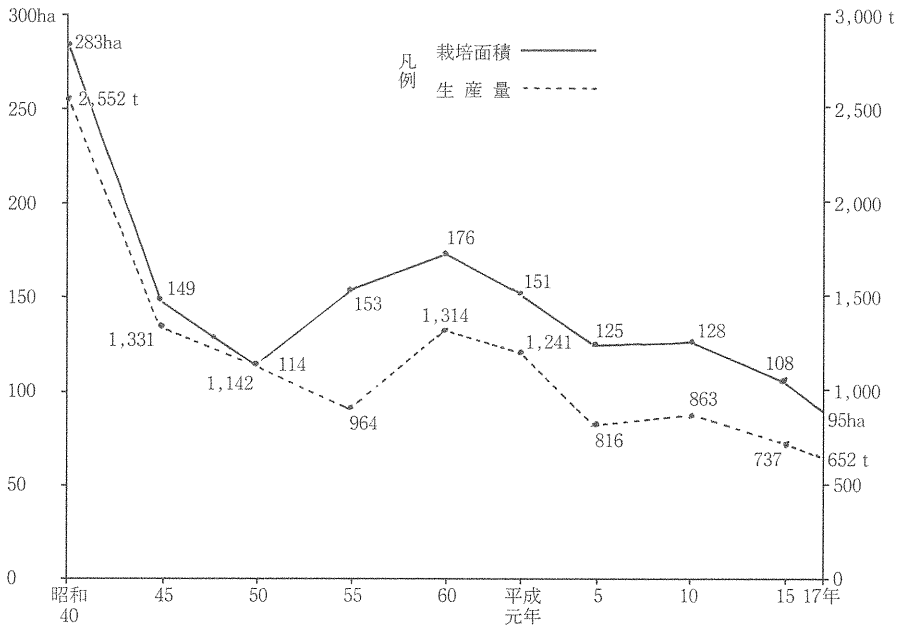


図4 愛媛県のもも栽培面積と生産量の推移

(窪田原図)

資料 愛媛県農林水産部 農業振興局農産園芸課 果樹統計資料により作成

周桑郡丹原町田野地区（現西条市）は周桑郡内の果樹栽培先進地で、大正期から関屋川扇状地の雑木林を伐採して愛宕柿が栽培され、昭和10（1935）年に桃が

導入され、昭和18（1943）年周桑郡内40haの中心的桃産地を形成した（図5）。

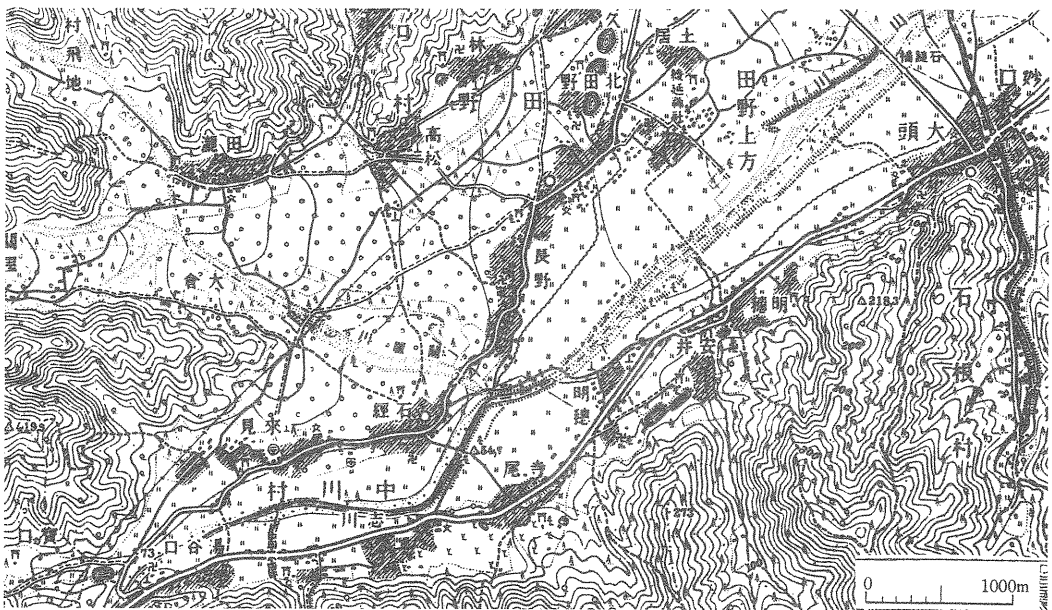


図5 西条市丹原町関屋川扇状地の図

地理調査所 明治39年測図，昭和3年修正測図，昭和28年応念修正，5万分の1，西条図幅地形図

昭和19-20（1944-1945）年代前半は低迷期、昭和25（1950）年朝鮮戦争を契機に、『大久保』・『岡山早生』・

『金蔵』などの品種を導入。30年代前半には特に罐詰用黄肉種（中山金桃）の産地化がすすみ、周桑郡でも

約80haの桃が栽培された（愛媛県1988, PP 353-357）。

昭和36（1961）年農業基本法が制定され果樹振興特別措置法、特に農業構造改善事業によって、温州みかんが成長作目の花形にとりあげられ、落葉果樹園のみかん転作がすすみ、桃の価格低迷（表6）により、丹町の桃栽培は衰退していった。

昭和36（1961）年41haが40（1965）年に8ha、43（1963）年1ha56（1981）年以後の新植で『白鳳』を中心に約8ha栽培されたが、平成6（1994）年丹原町の桃は果樹統計資料から消滅してしまった（図6・7）。

越智郡波方町（現今治市）の桃は「大久保」を中心に10haまで栽培面積の拡大がすすんだ。昭和45（1970）年ころまでは単価の安い加工用が主であったが、波方町農協桃部会は生食用品種へ転換を計り、45-47（1970-1972）年第1次導入計画で、町と農協が苗木代を助成して生産振興を計り、『倉方早生』『中津白桃』を導入して団地化を手がけた。

表6 愛媛のももとびわの1kg当り価格比較

年次	もも	びわ
昭和44年	73円	98円
50	117	249
55	184	315
60	152	462
61	141	554
62	202	590
63	194	553
平成元年	218	634
2	205	500
3	355	521
4	272	627
5	268	450
6	377	403

愛媛県農林水産部農産園芸課果樹統計資料により作成

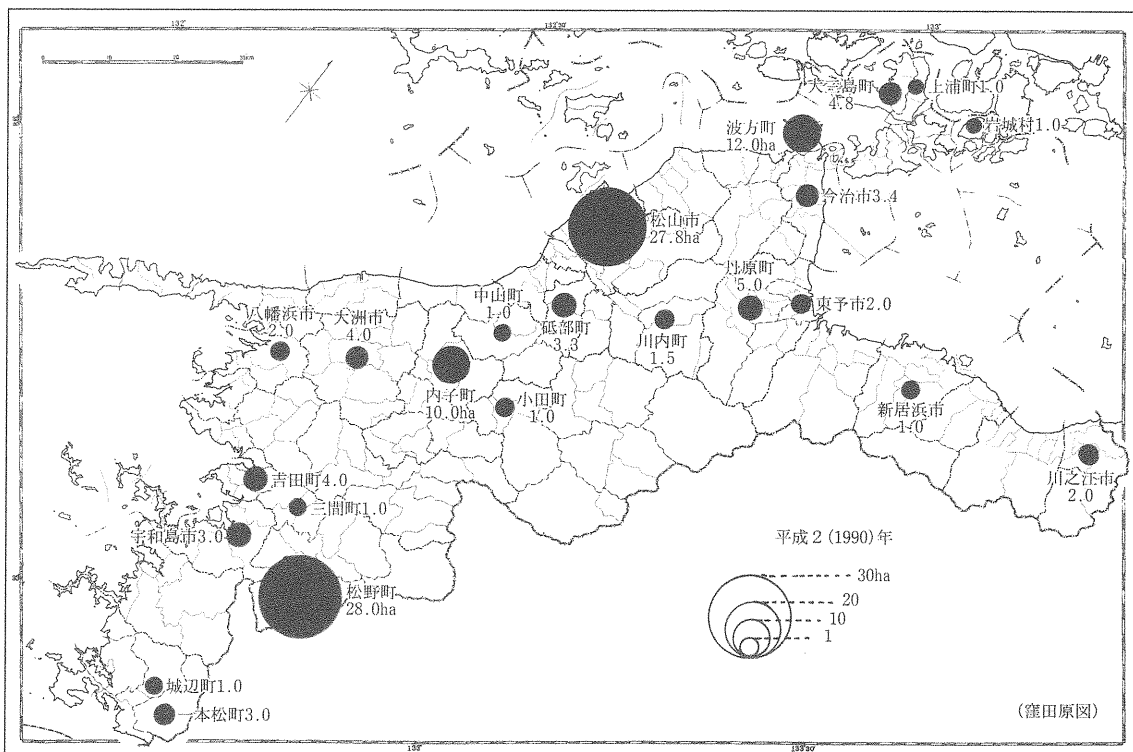


図6 愛媛県の市町別もも栽培面積の分布（1ha以上）
資料 愛媛県農林水産部生産流通課1991. 果樹栽培状況等表式調査により作成

昭和50-52（1975-1977）年第2次導入計画で、白鳳系『清水白桃』を導入76戸が17ha平均20aの栽培を行ったが、栽培面積は漸減傾向にある（愛媛県1986,

P 471）。

喜多郡内子町では小田川流域の和田地区を中心に10ha栽培され、昭和58（1983）年に河内の上田利幸が45

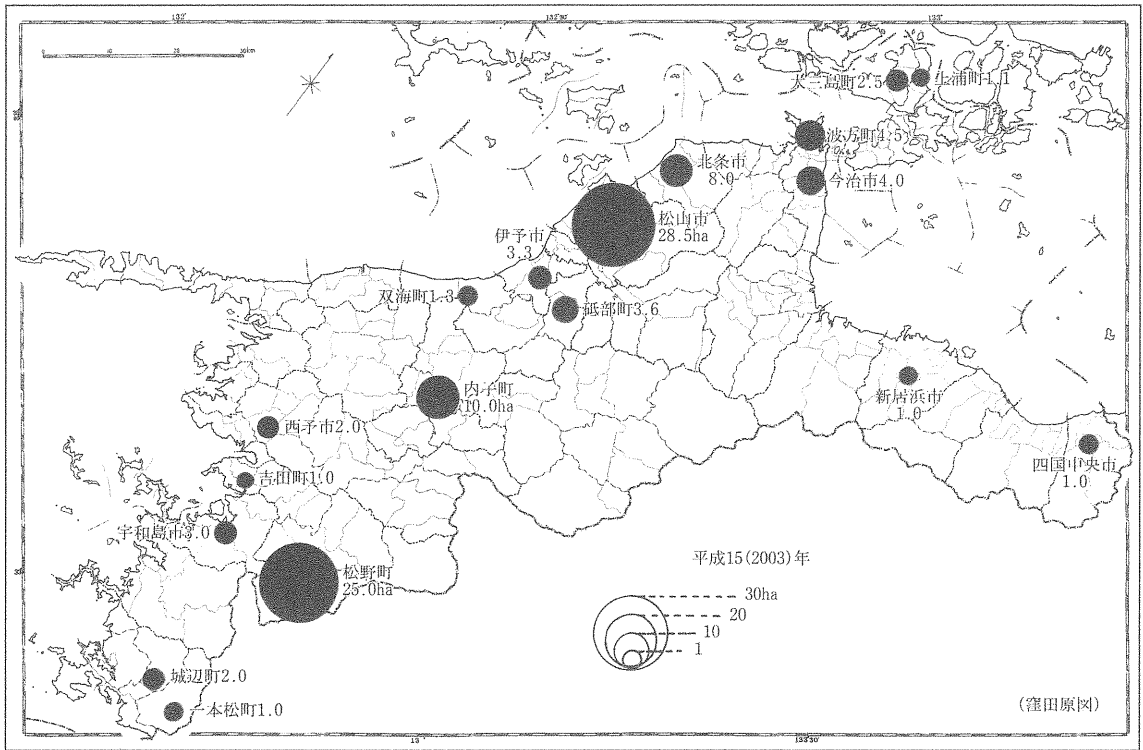


図7 愛媛県の市町別もも栽培面積の分布 (1ha以上)
資料 愛媛県農林水産部農産園芸課2004果樹統計資料により作成

aで観光農園「百楽園」をオープンした。栽培品種は、あかつき・浅間白桃・清水白桃・川中島白桃などである。収穫は7月中旬から8月中旬である。平成5(1993)年内子町における生産戸数は30戸で10haの桃園を経営し、生産量は60tである。(新編内子町誌1995, P573)。

4 松野町の桃園地の台頭

北宇和郡松野町では過疎化高齢化による農業環境の深刻な状況打開策として、大規模な農地開発を行ない経営規模を拡大し、優良作目の生産団地として安定的農業経営の育成の必要性から、県営農地開発事業を導入した。

昭和50-51(1975-1976)年にかけて111haの農地を造成し、開発農地に茶・花木・桑園とともに桃園を造成した(松野町2005, P274)。桃は52(1977)年から植栽がすすみ、広見川の河岸段丘上の^{のびのび}の延野々・五郎丸・緑ヶ丘を中心に10団地38haの小規模分散団地が形成され、昭和54(1979)年から出荷が始まった(図8)。

平成17(2005)年の県内の桃生産状況は(表7)の如く、松山市に次ぐ県下第二の桃産地に発展した。立

地条件は4月-6月の降水量が700mmもあり、農林水産省の示す適地基準の400mm以下を大きく上回り、しかも粘土質土壌の不利な条件にありながら、本県では唯一の本格的な共同選果体制の下で、農家の栽培努力により西南暖地の特性を生かしたうまい桃作りを行っている。参加農家約100戸、1戸当たり平均面積30a、他作物との組合せによる複合経営で、産地の特徴は関係機関団体が生産から販売まで一貫した指導を行っていることである。(農耕と園芸1990, P191)。

平成21(2009)年には、JAえひめ南鬼北桃部会の55軒が20haで栽培を続け、宇和島市・松山を中心とする市場評価も高い。

栽培作業暦は4月末から5月中旬に摘果、5月中旬から下旬に袋かけ作業、6月-7月上旬に除袋収穫、8月下旬から9月中旬に夏秋枝の整枝剪定など基本的技術の励行徹底をはかっている(愛媛高教研地理部門1999, PP68-70)。

労働力は婦人・高齢者依存の兼業経営で、田植期と桃の袋かけ作業が重複するため、早生は無袋栽培で収穫期は7月中旬から8月上旬に集中している。そのため品種の組合わせと労力の季節的配分を調整考慮し

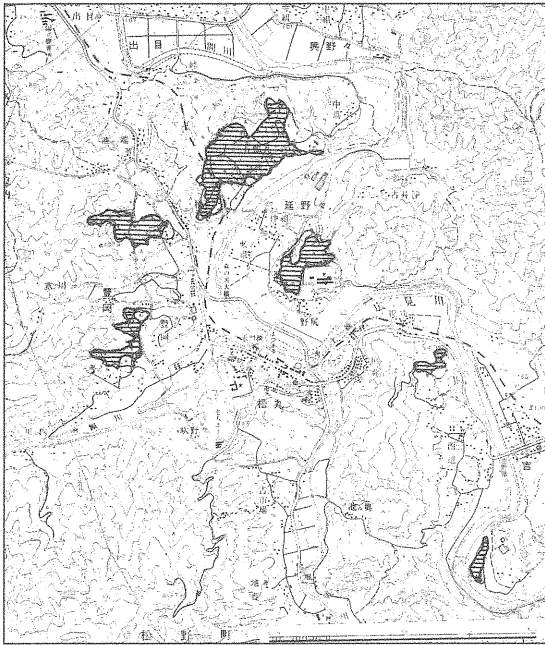


図8 松野町の集团的もも栽培地域の分布
1 : 25,000地形図 松丸 平成8年部分修正

て、昭和52（1977）年導入当時は土地条件が同質化しているため、『大久保』・『早生小平』など品質が均一な加工用が中心であったが、生食用の『白鳳』系に切替えている。

『愛媛県史地誌Ⅱ南予』（1985, PP 532-533）は、「気温が高く出荷期が他産地より早い利点はあるが、4月から9月の降水量が200mm以上に達する多雨地域で、日照時間が短いため炭疽病の発生が多く、7月下旬からは夜蛾の発生が多い。桃も玉が小さく宇和島・松山など県内市場向けが多い」という。

昭和60（1985）年度から桃の宣伝活動として、桃の木オーナー制度を設けている。宇和島市や松山市からの申し込も多く、桃は茶・雷漬に加え加工食品としてピーチワイン・ジャムなど松野の顔として、地域活性化に一役果し、虹の森公園ではJAえひめ南鬼北もも部会が松野ももまつりなどを催している。

表7 平成17年（2005）市町別ももの栽培面積と生産量

市町名	栽培面積 ha			生産量 t	販売数量 t
	未成園	成園	計		
新居浜市		1.0	1.0	7.0	3.0
四国中央市		1.0	1.0	3.0	3.0
今治市	0.4	12.0	12.4	110.5	46.3
上島町		0.8	0.8	3.2	3.0
松山市	3.4	27.1	30.5	290.0	275.7
伊予市	1.2	3.2	4.4	20.2	19.2
東温市		0.2	0.2	1.0	
砥部町	1.6	3.1	4.7	45.0	40.3
八幡浜市		2.0	2.0	8.0	7.0
西予市		1.0	1.0	3.0	1.0
内子町	0.8	8.7	9.5	46.0	44.0
宇和島市		4.2	4.2	28.0	11.0
鬼北町		0.4	0.4	1.0	1.0
松野町	4.0	18.0	22.0	80.0	65.0
愛南町		1.2	1.2	6.0	
県計	11.4	83.9	95.2	651.9	519.5

愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課2006。果樹統計資料及び果樹栽培状況等表式調査により作成。

5 桃の品種交代と販路

わが国の桃は明治7-8（1874-1875）年ごろに中国欧米から新しい品種の苗木が輸入された。桃は自然交雑による偶発実生によって優れた品種が出現しやす

い。このうち中国系品種の『天津水蜜桃』と『上海水蜜桃』が日本人の好みにあい、明治25-26（1892-1893）年ごろ全国的に普及し、明治30（1897）年前後に中国系品種を改良して日本独自の新品種が作りだされた（筑波1983, PP 96-99）。

小林（1986, PP 73-75）によると、“桃・栗3年柿

8年”と、桃は一年生苗木を植付てから普通は3年、ぶどう3-4年・梨4年・柿4-5年・温州みかん5-7年で、資本投下してから回収しはじめる期間が早くて成熟期間が短い。

桃・ぶどうは3-4年で結実し始めるかわりに、生産寿命が15-40年で短い。リンゴ・温州みかんは収穫が始まるまで5-6年を要するが、生産寿命は50-70年と長く、10a当り収量も桃の100(37.3t)に対し、ぶどう156(158.3t)、リンゴ342(127.5t)、温州みかん325(121.0t)の差がある。

果実の品質は樹令と共に向上するから、経済的収支が相償う樹令(経済年令)は桃が5-6年、梨5-7年・柿8-9年・リンゴ10-13年・温州みかんは14年を要し、累計収支が黒字になる資本償却年令は桃8年、ぶどう8-10年・梨7年・柿12年・リンゴ20年、温州みかん23年である。

桃は果樹類の中では、単位面積当り収量が極めて小さく樹令寿命が短かく、樹一本で生産される果実の総収量の最も少ない種類である(小林1986, PP73-75)などの理由によって、品種の交代が早く新品種が風靡している。

永澤(1976, PP68-69)によると、『白桃』は明治32(1899)年岡山県赤磐郡熊山町(現赤磐市)の小山益太郎の指導を受けた大久保重五郎が、自園で発見した偶発実生で上海水蜜桃の血をひくと推定されている。

全国的に奨励品種として長い生命を保っている『大久保』は、大正末期に大久保重五郎が自園の白桃園で発見したもので、昭和2(1927)年白桃系優良品種として発見者の名をつけて発表し、昭和9(1934)年から全国的に普及した。

『白鳳』は神奈川県農業試験場園芸部が白桃に橘早生を交雑した実生から選抜、昭和8(1933)年命名発表した。戦後の果樹発展期にその優秀性が再確認され、全国的に普及した。

早生品種の『布目早生』は、愛知県春日井市西島町の布目清が自園の白桃・離核・大久保・岡山早生の混植園から得た種子の実生から選抜したもので、昭和16(1941)年初結果し昭和26(1951)年名称登録した(永澤1976, PP68-69)。

『砂子早生』は岡山県赤磐郡熊山町(現赤磐市)砂子政市が同町上村輝男の桃園の神玉・大久保の中から実生と思われる樹で、昭和8-9(1933-1934)年ころ早生の優良品種を発見。その穂木を譲り受けて栽培

した。昭和33(1958)年名称登録し、早生の代表的品種として栽培面積を拡大し無袋栽培の最適品種として優秀性が認められた。

『倉方早生』は、倉方英蔵が朝鮮慶尚南道蔚山郡長生浦で長生種(タスカン×白桃)に実生種(ゴム肉質の早熟種)を交配して採種、引揚の際種子を持ち帰り、東京都目黒区中目黒の自宅で播種したものである。昭和24(1949)年8月種苗登録され『倉方早生』と命名された(農林統計協会1972, PP152-153)。

昭和23(1948)年県立果樹試験場が松山市東野町に設立して、罐桃の試作を始めた。

桃には果肉の白い白肉種と黄肉の罐詰用品種がある。果肉の白い水蜜桃品種では罐詰に際して加熱殺菌すると、果肉が軟弱で溶けたり、核の周囲の赤い色素が溶出してシロップが濁ったり、香気が少なく果汁の酸味が少ないのが欠点である(小林1986, P162)。

昭和30(1955-)年代罐桃と呼ばれる外国産黄肉種(中山金桃)が導入され、罐詰専用種として周桑郡丹原町を中心に契約栽培が推奨され、産地化がすすんだが、芳香が強く夜蛾の被害に悩まされ、価格の関係で生産地として定着しなかった。

昭和30-40(1955-1965)年代にかけて、わが国の桃産地は甲信越、東北へ産地移動が起り、岡山県を頂点とした西日本の桃産地は急速に衰退し、愛媛の桃園も温州みかんの適地は、その殆んどが温州みかん園に転換した。

桃の需要は生食・加工用ともに伸びてきたが、罐詰桃の生産基盤も東北に移った。昭和32(1957)年の県の桃の奨励品種は生食用の『倉方早生』・『大和早生』・『箕島白桃』・『大久保』・『白桃』・『大内白桃』と加工の『罐詰2・5・12号』の九品種であった。

昭和50(1975-)年代の愛媛の栽培桃の主要品種は『大久保』・『白鳳』・『倉方早生』・『砂子早生』・『布目早生』で、近年は『白鳳』を中心に『あかつき』・『サマーユース』など中熟系品種が増加傾向で、昭和53(1978)年度新種苗法の施行以来30余品種が登録され、品種戦国時代の様相を呈した(愛媛県1988, PP354-355)。

平成2(1990)年の栽培品種は23種、加工用の罐桃はなくなり市場向け生食用品種のみになった(図9)。平成2(1990)年の栽培面積127.7haの品種構成は『あかつき』14%・『白鳳』14%・『山梨白鳳』8.5%・『大久保』8.1%・『清水白桃』6.9%の五品種で51.5%を占めている。

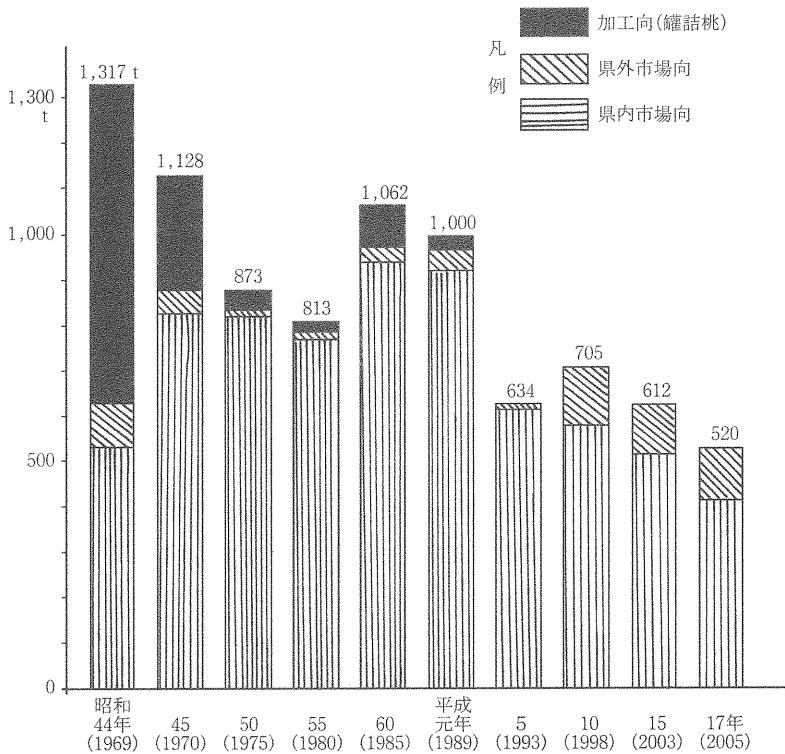


図9 愛媛県産ものの販路動向 (窪田原図)

愛媛県農林水産部農産園芸課果樹統計資料により作成

平成5(1993)年の主要品種は九種で124.5haの18%が『白鳳』、16.5%が『あかつき』、『川中島白桃』10.6%、『山梨白鳳』8.6%、『大久保』は5ha6.3%になった。

平成9(1979)年126.2haの主要10品種のトップは『あかつき』21.5%、『川中島白桃』21.5%、『白鳳』16.8%、『山梨白鳳』8.3%、『清水白鳳』『日川白鳳』に次いで

つて興居島でも一地区に30種類近くも栽培され、1戸当り10種類以上作った場合もあった。(山中1986, PP137-138)という。

桃は貯蔵がきかないので、遠距離輸送に適さず、果実の損傷が容易で収穫後4-5日で消化してしまわなければならないデリケートな果実である。昭和26(1951)

『大久保』が2.1ha1.6%残っている。寿命の長い優良品種である。

平成15(2003)年栽培面積107.8haの1位品種は『あかつき』32.1ha29.8%が松山市伊太・五明地区を中心に栽培され、松野町の主力品種『白鳳』が21.9ha20.3%を占め、他に『川中島白桃』14.0%、『日川白鳳』6.9%、『清水白桃』4.2%、『砂子早生』2.4%、と品種交代が激しく、『大久保』は1.7ha1.6%の長い生命力を維持している。

平成17(2005)年栽培面積は95.3haになった。市町別栽培品種構成は(表8)のように、桃は他の果樹に比べ新品種が多くでき、成木化が速い。新品種ができるとすぐ植付けするなど一市町内で数種類以上の多品種を栽培しているのが特徴である。か

表8 愛媛のもの市町別品種構成 平成17年(2005)産

(単位ha)

系統 市町名	布目早生	ちよひめ	日川白鳳	武井白鳳	やまなし 白鳳	倉方早生	砂子早生	白鳳	あかつき	川中島 白鳳	大久保	清水白桃	浅間白桃	まなみ	よしひめ	都白鳳	白桃	その他	合計
新居浜市								1.0											1.0
四国中央市									1.0										1.0
今治市			0.5			0.1		2.4	2.1	1.4	1.5	2.6		0.1		0.6	0.5	0.6	12.4
上島町	0.1		0.1			0.2		0.1		0.1	0.1	0.1							0.8
松山市			3.0	0.3				16.3	7.9			0.1			2.2			0.7	30.5
伊予市		0.1	0.2					2.6	1.2									0.3	4.4
東温市								0.1										0.1	0.2
砥部町		0.1	0.2					2.5	1.0			0.1			0.1			0.7	4.7
八幡浜市								0.6	0.9			0.5							2.0
西予市								0.5									0.5		1.0
内子町			0.5	0.5				4.5	0.5			0.5	1.5					1.5	9.5
宇和島市			0.1	1.3	0.1		0.3	1.0	0.1	0.2						0.2	0.9		4.2
鬼北町								0.2		0.2									0.4
松野町			2.0	0.5				15.2		2.0					1.0		1.0	0.3	22.0
愛南町							0.2											1.0	1.2
果計	0.1	0.2	6.6	2.6	0.1	0.3	0.5	20.4	29.8	15.4	1.6	3.9	1.5	0.1	3.3	0.8	2.9	5.2	95.3

愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課2006果樹統計資料及び果樹栽培状況等表式調査P52により作成

年ころの主要販路は県内市場が44.3%、県外向28.1%、加工用（罐詰）27.6%の割合で、県外市場は北九州市41.4%、広島市40.5%、大阪市9.0%、神戸市6.3%、その他2.8%で、県外市場も比較的近距离の北九州・広島で8割を占めていた。

昭和30-40（1955-1965）年代になると、加工用が6-7割。県内向け3-4割、50（1975-）年代には加工用が減って、罐桃の栽培減少が桃全体の栽培減少に繋がった。平成13（2001）年には加工用罐桃は果樹統計資料から消滅し、県内市場向生産販売割合が7-8割を占めるようになった。

平成8（1996）年から関東市場へ21t（4%）京阪神市場へ28t（5.4%）出荷した。平成17（2005）年には販売総量520tのうち、関東市場21t（4%）、京阪神28t（5.4%）、名古屋市場へ初めて1t出荷、その他の県外市場へ54t（10.4%）、2割を県外市場に販路拡大し、東京関西市場に微々ながら進出の兆候も示している（図9参照）。

6 おわりに

桃の花は観賞用にもなり、果実は食用として夏の味覚を楽しませてくれる。果樹園芸農業の先駆の果樹で歴史は古い。愛媛の桃は興居島を中心に瀬戸内沿岸で商業的栽培が発達し、やがては温州みかん産地形成の素地をつくっていったともいえる。

桃は品種交雑による新品種の育成が容易で成熟期が早いことから、産地形成転移現象が著しい果樹である。生産にかける手間の割合に収益性が低く、本県果樹作物の中では脇役的存在である。

昭和50（1975）年代、北宇和郡松野町で過疎対策と農業環境改善に、行政主導の農地開発による集団的桃団地が育成され、県下の桃のトップ産地に台頭し、「鬼北のもも」として地域活性化の素材としても注目されていることは画期的なことだと思う。

注および引用参考文献

注1）本史は田村信嘉が明治38（1905）年2月稿を記し、以来精密な調査を重ね田村昌九郎が信が事暦より筆を始め、明治42（1909）年に至る間の本園事業を記録したもので、明治6（1873）年より42（1909）年に至る晴耕園の當農記録誌である。興居島果樹栽

培に関する諸研究はすべてこれを引用しているといっても過言ではない基礎資料である。

注2）広島県豊田郡大長村（現豊田郡豊町）で栽培された大長桃（俗称油桃若しくはカタチ桃）と言われ、その起源は1,200年前にさかのぼるといふ。儒者進藤一郎の天保年間の日記の中に、広島の家へ土産物として持参した記録がある。最盛期は明治24-25（1891-1892）年ころ、その後新品種の水蜜桃の導入で栽培は殆んど行なわれなくなった。（農林統計協会1977、果樹農業発達史P601）

阿川一美1988、果樹農業の発展と青果農協・財団法人果樹産業振興桐野基金 607頁

伊予果物同業組合1932、伊予のくだもの 67頁

内子町誌編纂委員会1995、新編内子町誌 1,054頁

愛媛県青果農協連合会1968、愛媛県果樹園芸史 1,104頁

愛媛県1988、愛媛県農業技術史 731頁

愛媛県農会1916、伊予乃園芸 162頁

愛媛県教育会北宇和郡部会1933、親民鑑月集 159頁

愛媛県1986、愛媛県史地誌Ⅱ東予西部 890頁

愛媛県高校教育研究会地歴公民部会地理部門1999、地域調査報告「鬼北盆地の風土と人々のくらし三間町・広見町・松野町」267頁

愛媛県1965、愛媛県史地誌Ⅱ南予 902頁

愛媛県1954、愛媛県農村経済研究所第12号「愛媛県農業振興計画書第一次」342頁

窪田重治1990、興居島における果樹栽培の変遷「愛媛県の果樹生産地の形成とその変容」青葉図書 339頁

小林章1986、果樹と日本人 日本放送出版協会 230頁

田村信嘉1910、晴耕園史 玉林堂 172頁

田野村誌編纂委員会1957、田野村誌 693頁

筑波常治1983、農業博物誌3 玉川大学出版会 207頁

農林統計協会1972、果樹農業発達史 981頁

農耕と園芸編集部1990、園芸特産地ガイド3 中国四国九州 誠文堂新光社 239頁

永澤勝雄1976、果物のたどってきた道 日本放送出版協会 295頁

松野町2005、松野町誌改訂版 1,237頁

村上節太郎1951、愛媛県の果樹栽培地域の地理学的研究(1)「愛媛大学紀要第四部社会科学第1巻第2号」愛媛大学 PP65-94。

山中俊彦1986、興居島を中心とした愛媛のもも「愛媛の島々と自然」愛媛自然科学教室 PP137-138